

[25] ノイマイヤー振付『幻想 ～「白鳥の湖」のように』

《影の男》をどう解釈するか…

1994年4月1日 東京新聞 夕刊

このところバレエ『白鳥の湖』の新解釈による新演出の試みが盛んである。いかに傑作だといっても毎度おなじみでは飽きてしまうし、ちよっと手を加えることで、作品がぐっと新鮮になることもある。

もっともこれまでのところ、どの新演出もストーリーには変更がなかった。白鳥に変えられた王女を愛した王子が、お后選びでよく似た黒鳥を選んではまう。しかし王子は命に代えて愛を貫き、二人は天国で結ばれるというもの。甘くて幼稚なお話と言え、それまでだが、チャイコフスキーの叙情的な音楽とブテイパ／イワノフの優雅な振付が相乗的な効果を發揮して、このバレエにはいつも極上のロマンティックの香りが漂っていた。

ところが、いま来日中のハンブルク・バレエが上演したのは、まったく意表をつく発想のものだった。ジョン・ノイマイヤーが演出・振付したこの『幻想』「白鳥の湖」のように』は、チャコフスキーの『白鳥の湖』全曲をそのまま使用し、各所に古典バレエの見所は残しているが、しかしまったく別の新しい作品として作られている。

* * *

『幻想』の表向きの主人公は、一九世紀に実在したバイエルン国王のルートヴィヒ二世である。築城と芸術に熱中したあげく幽閉されて、水上に謎の死をとげた人物だが、その彼が錯乱のなかで顧みる過去の情景、それが古典の『白鳥の湖』と重なり合う。幻想とは原題でイリュージョン、つまりは幻覚である。

無音のまま幕が開くと、石の壁にかこまれた小部

[25] ノイマイヤー振付『幻想 ～「白鳥の湖」のように』

《影の男》をどう解釈するか…

1994年4月1日 東京新聞 夕刊

屋。そこへ王が連れてこられ、ひとり残される。扉を釘づけにする槌の音。そして、あの哀切な序曲が始まった。悲嘆にくれる王の背後で石の壁が左右に開き、幻想の場面となる。

第一幕は城の棟上げ式、第二幕は古典『白鳥の湖』第二幕の御前上演、そして第三幕は舞踏会とつづくが、どの場面ももとの『白鳥の湖』を下敷きにしなからも異なる設定で構成してある。たとえば第二幕では、始めのうち王は舞台の端でバレエを観ているのだが、やがて舞台と現実の区別がつかなくなり、王子を押しつけて白鳥姫と踊り始めるのである。クラシック・バレエの極致ともいべき愛のパ・ド・ドゥが、奇妙な、しかしそれなりに美しい三人のパ・ド・トロワになり、崇高な古典が、崇高なまま戯画になるという不思議な現象が展開した。王の錯乱は痛ましく、しかも滑稽である。同様に、神秘的であるはずの白鳥たちがどこかコミックに見えてしまうのだ。

また第三幕の舞踏会では、白鳥の舞姫しか愛することのできない王の心に近づくために、許嫁の王女が白鳥の姿で現れ、王と黒鳥のパ・ド・ドゥを踊る。王は我を忘れて愛を誓うが、しかしそれも錯覚にすぎないことが次の幕で示される。第四幕の始めの、女が男にすがりつき、くずおれ、引きずられる踊りは、大胆な造形が現代的な心理表現となっていて、強く印象に残った。このバレエもまた一つの悲痛な愛の物語、自己にとらわれてイメージとしての相手しか愛せない人間の悲劇である。

* * *

[25] ノイマイヤー振付『幻想 ～「白鳥の湖」のように』

《影の男》をどう解釈するか…

1994年4月1日 東京新聞 夕刊

幻想を打ち砕くのはいつも、黒衣の「影の男」だ。第二幕では悪魔ロットバルトに変じ、第三幕ではピエロとなって興じるが、幕切れごとに正体を現わして王を絶望に突き落とす。幕を重ねるにつれて存在感を増していくこの「影の男」をどう解釈するか、それがこの作品の鍵だろう。ルートヴィヒ二世やチャイコフスキーの実人生に則して、美の世界に耽溺し現実を失った芸術家の不幸と見てもいいし、同性愛を想定することも可能である。また死病に苦しむ者なら死の影を感じるかもしれない。芸術であれ性愛であれ病気であれ、自分だけの完結した世界を持ってしまった人間の悲哀が、このバレエの主題であり普遍性である。思えば私たちは皆それぞれに、「影の男」というもう一人の自分とともに人生を歩んでいるのだ。

バレエ『幻想』は、古典作品の深層の構造を説き明かすと同時に、パロディ化による古典批判の試みでもあったが、また人間存在の根源的な悲劇をも垣間見させてくれた。